

支給、そして税の減免などが指示された。そしてこの時代のあり方としては、さらに為政者によって宗教的な対処も行われるのが通例であった。

推古天皇七年(五九九)の地震では、「四方」に命じて「地震神」を祭らせている。天平六年(七三四)の大地震では、「政事に欠があつた」ことを警告するために山陵が動じたことが原因とみなされ、諸官の引き締めを命じた。嵯峨天皇の弘仁九年(八一八)の関東地方の震災でも、同様の詔が出された中で、卜筮の結果として神霊の咎祟があつたことを認め、諸国分寺において金剛般若経を転読することが命じられている。

この時代では、災害を神霊のしわざと規定し、神祇官や陰陽寮の卜占によっていかなる神霊のしわざかを特定し、そのうえで神霊への対処や死者への読経を行うことになっていた。災因の説明は超自然的に説明され、またその対処の方も宗教的な営みが核にあつたわけである。そして古代における救済は、共同体の存続を脅かす要因の除去を中心としていたので、ここでは災因論と宗教的な救済とは一体となつて社会的に機能していた。宗教的な要素抜きでは災害への対応が完結しないし、また救済の論理や方法論も自然とそこに組み込まれていたわけである。私はかつてこのような体制を「崇りのシステム」と名付けたことがある。災害のたびに卜占で神霊的な原因を特定し、必要な宗教的対処を行うことで、社会が平穏を取り戻す形を作り、また社会的な不安心理を取り除くことが継続的に朝廷によって行われてきたのである。これは古代日本的一種の神義論をも含んでおり、ある時代までは特に有効に機能したシステム

であつた。

しかしこれはもちろん現代社会では適用できないものである。今日における救済対象は、共同体そのものではなく、その中に生きる個々人でなければならない。ゆえに現代の宗教は個人の悩みを解決するという方向性が強く、また現世利益的でもある。こうしたあり方のもとでは、大災害時に苦難の神義論自体を主張することが、ある種の違和感をもたれることになる。日常的な宗教活動において各個人の内面的な救いを説いているのであれば、災害に対しては普段の布教とはまったく別のスタンスも必要となつてこよう。

いかにしていま一度、宗教が災害に際して説得力のある救済論理を打ち出せるかが、今まさに課題として浮かび上がっているのである。

カトリックの宗教儀礼のもつ社会的役割

——初聖体の事例をもとに——

岡 光 信 子

本発表では、南インドのコータ教区マイラコードウ小教区の事例を取り上げる。カトリック教会の宗教儀礼である初聖体に関わる準備、挙行、祝賀までの一連の過程を精査して、宗教共同体の役割と祝賀行事の社会的意義を明らかにし、宗教儀礼の遂行に伴う宗教性と世俗性の問題について考察することにある。カトリック教会では、信仰に照らされた正しい理性に基づく行動を導く霊的な習性・資質を「徳」と呼んでいる。徳の中で

「慈善」が最も重要であり、人をして神を愛し、かつ他者を愛し気遣うことを可能にせしめるという。カトリック教会は、信仰を共有する人々の集団を共同体と呼ぶが、共同体の成員にとどまらず、慈善の精神に基づいて他者の利益にもなるよう協力することを美德とみなしている。古代から、慈善の名のもとに、キリスト教共同体は貧しい人々と分かち合い、困難にある人々に手を差し伸べてきたとされる。

カトリック教会が行う公的な宗教儀礼が「典礼」である。典礼の中で最も重要なのが秘跡であり、①洗礼、②聖体、③結婚、④堅信、⑤病者の塗油、⑥ゆるしの秘跡、⑦叙階、の七つから成る。聖体は、秘跡の中で最重要視されている。初聖体は、拝領者に宗教的な益をもたらし、共同体に慈善の精神に基づく協力と一致を課す宗教儀礼だからである。聖体をはじめて拝領する「初聖体」には、司祭、拝領予定者の世話にあたる両親、日曜学校の教師など、共同体を構成する者たちが責任を負うものとされている。

聖体は、タミル語で「新しい善行」を意味する「ブドウ・ナンマイ」と呼ばれる。当該教区では、初聖体は守護の聖人の祝日間に行われる。初聖体のためのカテケジス（要理教育）は、守護の聖人の祝日の約一ヶ月前から始まり、祝日に向けて人々の気分を盛り上げるものとなる。初聖体のためのカテケジスでは、「日曜学校」と通称される普段のカテケジスを担当している先生たちがボランティアでカテキスタを務める。彼らは、教会活動全般に熱心な信者であって、初聖体拝領予定者の親とも周知の間柄にある。親は同じ共同体の成員が初聖体の

ためのカテキスタを務めることから、子供の要理教育を安心して任せ得るのである。

初聖体拝領予定者は、月曜日から土曜日の午後五時半に教会敷地に集まり、男女混合の二つのクラスに分けられ、各一時間前後、カテケジスの授業を受ける。ここでは、聖書、カトリック教会の教え、初聖体への心得、キリスト者としての日々の生き方などが教えられる。子供たちは、早朝のミサにも出席が求められ、毎日出欠が確認される。初聖体は、カテケジスの受講、早朝ミサへの参加、司祭による質疑応答、ゆるしの秘跡を経たのちに行われる。十日間にわたる祝日の九日目、朝七時開始のミサの中で、九歳から十三歳の三十五人は、ひざまずいて信仰告白を唱えたあと、男子から順に聖体を拝領する。

このようにコータ教区では、初聖体の一連の過程に共同体が不可欠な要素として深く関与している。コータ教区は、初聖体を記念する祝賀会を家庭で行うことを奨励し、親族や知己が祝賀に招かれる。初聖体は、宗教儀礼でありながら、祝賀という世俗的な行事が随伴する。初聖体の祝賀会は、宗教的行事の記念という名目で開かれるが、拝領者の家庭の親族関係を強固にするだけでなく、宗教などの違いを超えた多くの人々が参加することで、その家族が有する社会的ネットワークをも再確認し強化する契機となっているのである。

上の考察に加え、信仰に基づく共同体がその紐帯を背景として成員間に互酬的な関係を作り出す母体として機能していることも現地調査から知られる。信仰の共同体は、信頼や規範という「ソーシャル・キャピタル」の特質をも有しているのである。